
病

カルタ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病

【Nコード】
N0970Z

【作者名】
カルタ

【あらすじ】
九月一日。生まれて初めて、転入生として新学期を迎えることになった。

九月一日。生まれて初めて、転入生として新学期を迎えることになった。その日はよく晴れていて、残暑という言葉がどういう意味を持つが実に良く分かる陽気の中で、慣れない道をたどり、慣れない校門をくぐった。こぎれいな校舎を眺め眇め、昇降口で靴を履き替える。校舎の中はおよそ季節感を感じさせない気温で、熱のこもった体に快適だった。職員室まで迷わなかったのは、下駄箱のすぐ近くにあたから。そこまできて、初めてこの学校の生徒らしき人物に会った。

その男は、長身で筋肉がありラグビーでもやっついそうな体だった。短髪で金髪で髪をすべて逆立ていて、勇ましい顔つき。戦士。そんな言葉が脳裏を掠めた。

堂々としているがおそらく遅刻だろう。第一印象を整理してからそのことに気付いた。用もないので職員室の扉に手をかける。

「おい、お前」

呼び止められた。

「見慣れない顔だな。クラスどこだ？」

尊大でフレンドリーという、謎な話しかけ方をされた。

「何か用かい、お前」

だから謎な返事をしてみた。

「？ 面白い話し方するな。なに、ちょっと見かけない顔だから」
「今日転入してきたからね。用事がそれだけならもういいかい。これから職員室に行くんだ」

「ふむ、転入生か。なら話しておかなきゃな」

「後にしてもらえないかな。急いでる訳ではないけど」

「まあそう言うなって。時間とらせないし。この学校にいる以上、知っておく必要のある話だ」

「担任教諭からでも聞いておくよ」

「まあそう言うなって。時間とらせないし。この学校にいる以上、知っておく必要のある話だ」

「…分かった」

「おう。ちなみにこの話は、教師どもは絶対に話さない。知ってるが話したがない。だから、職員室では聞けない話だ」

「他の、たとえばクラスメイトとかからなら聞けるってことかい？」

「その通りだが、微妙に違う」

「？」

「他のやつからは間違った話しか聞けないってことさ」

優越感に浸るでもなく、ただ事実を話している様子に興味を引かれた。おそらくは他の生徒からも同じ話を聞けるだろうけど、こいつが何を根拠にしているかが気になる。

「この学校はな、頭のおかしいやつが多いんだ。ほとんど全員といつてもいい。自称狼男、自称預言者、自称未来人。そんなやつらがたくさんいる。しかもはったりじゃなく、自分で思い込んでやがる。だからなおたがが悪い」

「へえ」

「心の底から信じ込んでるから、否定するだけ時間の無駄だ。あんまりまともに相手にするな」

確かに、知らないよりは知っておいたほうが良い情報だった。

「そう。ありがとう」

「おう。そのことで何か困ったことがあったら、俺に言ってくれ。何とかしてやる」

「頼もしいねえ」

「ああ。…信じるか信じないかは勝手だかな。俺は、かのギリシャ神話の英雄、ヘラクレスの生まれ変わりなんだ」

担任教諭と合流した後は、当たり障りのない話をしつつ教室に向かい、何事もなく転入生デビューとホームルームを終えた。当たり前だが、緊張はしなかった。何かあったといえばその後の休み時間

「転入生君」

なかなかいろいろな呼ばれ方をされる学校だ。呼びかけてきたのはこのクラスの委員長。特徴というほどのものはなく、そこそこ美人。そこそこ長髪。そこそこ人がよさそう。そこそこ礼儀正しそう。そんな感じの女の子。ちなみに眼鏡はかけてない。

「なんだい委員長君」

「変わった返事をするのね」

「変わった呼ばれ方をされたからね」

「…まあいいわ。この学校で、特に気をつけなくてはいけないことを教えてあげる」

「…なに」

「この学校にはね、妄想癖というか、思い込みの激しい人が多いの。

ほら、あのクラスの前で一人突っ立っている男の子。あの子なんてヘラクレスの生まれ変わりだそうよ」

「へえ」

「だから、まあ気をつけなさい。でも何に、って感じよね」

「まあ、ね」

「何かあったら委員長の私に相談してよね」

「うん。…ありがとう」

「そうだ。君餃子とか好き？」

「嫌いじゃないよ。たまに食べるけど…」

「そう。…信じるか信じないかは勝手だけど、私吸血鬼の末裔なの。遠い昔に私の先祖にあたる人が吸血鬼と結婚したってだけだから、吸血鬼の名残はほとんど残ってないけどね。だから、にんにくや十字架を持って私に近寄らないでね」

授業そのものは前の学校と大差なく、別段難しくもなければ簡単でもなかった。帰りのホームルームが終わり、興味があるなら部活を見学してみるといい、と言われたが最初から帰宅部希望である。特にやることがないので、のんびりしていたらクラスには誰もいなくなっていた。

「その何もしてない奴やつ」

訂正。クラスには自分を含め二人いた。顔立ち髪型も声も中性的で、上半身だけでは男子か女子か区別が出来ない。年下に見えるが学年は同じはず。そして何より返事が思いつかない。

「えっと…僕のこと、かな」

「今お前以外誰がいる」

「うん。まあ他にいないのだろうけど」

「クラスメイトとしていちおう忠告してやる。まともにここに溶け込みたいなら聞いておけ」

「……………」

「この学び舎にはまともな奴は少なくとも二人、しかない。他は吸血鬼だの、狼男だの変なことを言う奴しかない。だが、まともに相手をするな。適当に聞き流しておけ。そうしていればそんなに悪いやつはいない」

「ああ、そう。いちおう、礼を言っておくよ」

「気楽だな。…信じるか信じないかは勝手だが、私は預言者なんだ。天啓のほかに未来が見えることもある。お前が困っている姿が見えたから、言っただけだ」

帰宅してからは特に何があったわけではなく、今日もおおむね平穩に終わった。どんなに常識はずれな出来事が起こっても、こうして無事に過ごせるなら何でもいいかな。ところで、今日知り合ったクラスメイトの言っていたことはどこまでが本当なのだろうか。もしかしたら全部本当だったり。ま、僕にも君にもあんまり重要じゃないよ。

さて、この数日後、僕らはあの不可解で、非現実的ともいえるような一連の騒動の発端のとある事件に巻き込まれるんだけど、その前に一つ、言っておいたほうがいいことがある。

信じるか信じないかは勝手だけど、僕は夏休みに車に轢かれて、長い間病院のベッドの上で眠り続けているんだ。

わり

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0970z/>

病

2011年12月3日18時49分発行